魂の声を聴く

那覇市立天久小学校六年　知念　由依

船の上から海をながめた
太陽の光が優しく海を照らす
青くかがやき白波がたつ
聞こえてくるのは
波の音と友達の笑い声

八十年前の君達も
同じ景色を見たのだろうか
戦争の足手まといになる
そう言われていることも知らず
はしゃいでいたのだろうか
軍かんではなく
古い貨物船に乗せられた
「おなかを空かせていないだろうか」
「疎開先でもがんばるんだよ」
親たちの心配をよそに
先生にすすめられるままに
あどけない笑顔を残し
対馬丸にのった子ども達

今夜はみんな救命胴衣をつけてねるように
敵の潜水艦に狙われていることも知らず
うす暗い星空の下で
友達と一緒に笑い合っていた
昭和十九年八月二十二日午後十時十二分
深い眠りの中
魚雷が命中
「早く飛び降りて！船から離れろ！」
「先生助けて」
「お母さんお父さん助けて」
子ども達の泣き叫ぶ声が
波の中に消えていった

夜の甲板に出て
対馬丸の子ども達のことを想う
海面さえ見えない真っ黒な海は
子ども達の命の光を
簡単にのみこんでしまった

犠牲者の魂は
海に眠る声なき叫びとなって
今を生きる私達に問いかける
本当に平和を守れているのか、と。

静かな波の音に耳を澄まし
目を閉じて祈る
二度と戦争のない
平和な世界を創ることを。
一つ一つの命がかがやけるように
未来に向かって
私ができることを
一歩ずつ踏みだそう